

戦後教材としてのガルシン「信号」——読書感想文と松川事件

秋草 俊一郎

1 はじめに

ある調査によれば、帝政ロシアの作家フセヴォロド・ガルシンは世界での評価と日本での評価がもっとも乖離した作家だという¹。これはつまり、世界における翻訳の流通量に占める割合に比して、日本での流通量が多かったという意味だが（調査期間は一九一二—一五五年）、背景には明治三七年に二葉亭四迷が訳出紹介して以来さまざまな訳者によって繰り返し訳されてきたこと、作品は短編が主だったため雑誌掲載・アンソロジー収録ふくめた翻訳件数が増加したことなどがあげられるだろう。そういった意味では日本人に親しまれてきたガルシンの全作品においても、「信号」は最大の日本人読者を獲得した作品だと思われる。なぜか。それは「信号」がかつては国語教科書の定番教材だったからである。

五四年度より使用された日本書籍の『山本有三編集 国語総合編 中学3年の1』での掲載を皮切りに²、三省堂、学校図書などが追随し、全盛期の六〇年代前半には七社の国語教科書で同時に使用されていた。初期から本作品を採用していた日本書籍、三省堂、学校図書以外にも、東京書籍や教育出版のような大手教科書会社もこの時期「信号」をこぞって採用していたのだ。使用学年は中学の二、三年で、まさに一世を風靡した教材と言える。

四九年から八六年度までに刊行された中学国語教科書に掲載された文学教材の「延掲載年」（その教材が掲載された教科書それぞれの掲載年数を合算したもの）を調査した研究によれば、「信号」の延掲載年数は113で、外国文学作品としては魯迅「故郷」135に次いで二位につけている。これは日本文学の当時の定番教材だった森鷗外「山椒大夫」105や志賀直哉「清兵衛と瓢箪」90をも上回っている³。ほかにガルシンの作品が国語教科書に採用されたのは、五七年より使用された中教出版の高校国語教科書『国語総合編高等学校 三』で寓話的な作品「アッターレア・プリンケプス」が採用されたのみなので、「少年の日の思い出」や「故郷」以外の作品も数多く採用され、最終的に定番が残ったヘッセや魯迅のケースとも異なり、ガルシンという作家ではなく、「信号」という作品それ自体が圧倒的に国語教育の現場の支持を集め、使用されてきたということがわかる。

しかしその一方で、六〇年代中盤から「信号」を採録する教科書は減りはじめ、七〇年度の時点で採用している教科書は三社のみとなり、長らくこの教材を採用してきた三省堂は『中学校現代の国語 最新改訂版3』（七五一七七年度に使用）、日本書籍は『中学国語

2』(七八一八〇年度に使用)を最後に採用をとりやめている。

こうして教科書採用まわりの情報を整理してみるとわかるのは、「信号」は流行教材であり、一時は定番教材でもあったが、「故郷」や「少年の日の思い出」のような世代を超えて共有される「超定番教材」にはなり損なった作品だということだ。

このような採録に関わる事情、そしてこれだけ使用された教材だったにもかかわらず「信号」に関して教材史的な観点から振り返った論説が皆無という現状を鑑み、本稿ではなぜ「信号」は一時期かくも読まれ、そして急速に光を失ってしまったのかについて、当時の世相や読書感想文のような資料を通じて論じてみたい。私がこれから論じるのは、ドーデ「最後の授業」が、占領下の教育改革という国語教育の存在自体が危ぶまれた時節を経験した人間にとって特別な意味をもった教材だったように⁴、「信号」もやはり一種の戦後日本の特殊な時空のもとに成立した戦争教材、いや戦後教材だったのではないかということである。

2 ガルシンと「信号」

論を進めるにあたって、まず著者であるガルシンと作品「信号」について基本的な情報を整理しておこう。

フセヴォロド・ガルシンは一八五五年、帝政ロシアのエカテリノスラフ県に生まれた。一八六三年に首都サンクト・ペテルブルグに転居し、教育を受けていたが、一八七七年に開始された露土戦争に義務感から志願して従軍。負傷による除隊後、同僚兵士の体験談に想をえた短編「四日間」を発表すると話題となり、新進の作家として注目されるようになった。一方で精神的な問題は早くからガルシンを苦しめ、執筆をたびたびさまたげたのみならず、最終的にはその命を奪うことになった。一八八八年、神経衰弱のため転地療養に出る直前に作家は階段の吹き抜けに発作的に身を投げ、その傷がもとで死去した。

そのガルシンが最後に書きあげた作品が「信号」(一八八七)である。内容は以下のようなものだ。露土戦争に出征したセミョーンが戦地から帰還すると、父や息子は死んでおり、仕事も失っていた。食いつめていたところ、駅でかつての上官にばったり出会う。駅長をしていた上官から線路番の仕事にあたえられたセミョーンは、奉公に出していた妻を呼び戻してつつましく暮らしていく。となりの番小屋に住む線路番のヴァシーリイは気難しい男で、番小屋のそばで畑を耕作する許可をめぐって線路監督ともめていた。二人はそれでも身の上話をするほどの間柄になる。ヴァシーリイは線路番の待遇の悪さをセミョーンにこぼし、「人食い鬼どもに、お前は食われてるんだ」と言う⁵。あるとき、線路監督と保線課長が点検にやってきて、ヴァシーリイを殴打するという事件が起こる。事件後、ヴァシーリイはモスクワに直訴にあがると言いのこして姿をくらましてしまう。その後しばらくして、セミョーンは線路に人影を認める——どうやら、レールの留め金を外しているようだ。その人物がヴァシーリイだと気がついたセミョーンは、戻ってレールを直すように懇願するが、ヴァシーリイは逃げて行ってしまふ。もうすぐ客車を引いた汽車がレー

ルを通りかかる。レールが外されたのはちょうどカーブの箇所であり、このままでは脱線して大事故になってしまう。セミヨーンはとっさに自分の二の腕に小刀を突き刺し、吹き出る鮮血でハンカチを赤く染めると、枝にくくりつけて即席の旗をこしらえた。必死に旗を振るセミヨーンだが、失血のため気を失ってしまう。だが倒れたセミヨーンから旗をとって振ったのはほかならぬヴァシーリイだった。無事停止した列車から出てきた人々にヴァシーリイは自分がレールを外したことを打ち明けて自首する。

冒頭で述べたように、ガルシンは日本での評価が高かった作家であり、世界的に見た場合、一流との評価を受けてきたわけではない。そのことはほぼ同時代人であり、やはり短編小説家だったチェーホフとくらべても明らかだ。ガルシンのもっとも有名な作品は精神患者の悪との戦いを描いた「赤い花」で、「信号」はガルシンの作品の中でもかならずしも評価の高い作品ではない。つまり、きわめて雑駁な言い方をしてしまえば、世界的に見てそれほど評価の高くない作家の、それほど評価の高くない作品が日本の国語教育では特に愛好されていたということになる。

3 教科書初採用とその周辺

では、そのガルシン「信号」の教材化はどのように開始されたのか。この短編がはじめて教材化されたのは、五四年から使用された『山本有三編集 国語総合編 中学3年の1』だったことはすでに述べた。このときは「働く人々」という单元の中で、笠信太郎「イギリスの労働者たち」、高橋是清「米国人と金」のような世界各国の労働をめぐる評論文、「事務室の電話」、「敬語を正しく」のような実務的な文章にまじって配置されている。種々の言語実践を重視する米国由来の経験主義の影響が強かったこと、また当時の——一九五五年の高校進学率は五〇パーセントほどであり、中学生といえども労働が身近だった——時代柄がうかがえる单元構成になっている。その中で「信号」はロシアの労働者の様子を伝えるものとして採用されたようだ。

このように労働というテーマと絡めるかたちで採用がはじまった「信号」だが、採用側の意識はどのようなものだったのか。ひとつ、それを伝える資料が残っている。出版労連教科書対策委員会が刊行していた『教科書レポート』の一三号（一九六九年）では、おそらくは教科書会社社員が書いたものと思しき「中学国語教材にみる教材の変遷」という記事の中で、以下のような文章が見られる。

外国の作品に、編集をする側から求めるものは、日本文学で取り上げたのでは採りにくいテーマです。即ち、教科書教材としてタブー視されるものです。外国のできごとだとしたほうが検定に通りやすいからです。

- ① 戦争を扱ったもの
- ② 愛情を扱ったもの
- ③ 反権力・反体制を扱ったもの

④ 貧乏・罪を扱ったもの

[中略]

③では、「故郷」「信号」が採られております。⁶

このように、「信号」は「反権力・反体制を扱った」作品だという教科書作成側の認識がはっきりとしめされている。直接に労働問題が描かれ、故意の脱線事故未遂が描かれる「信号」はともかく、「故郷」もそうだというのは驚きかもしれない⁷。ただ、この認識の背後には、戦後の国語教科書における外国文学導入の経緯もあると思われる。

敗戦後、占領軍の意向もあり外国文学が国語教科書に多数掲載されるようになったという事情はすでに先行研究でも指摘されているとおりだ。GHQ / CIE の監督のもとで作成された国定教科書である『中等国語』を評して、国語教育学者の吉田裕久は「この教科書[『中等国語』]を手にした中学生たちは、まさに世界が開ける解放感を味わうとともに、国際社会の中の日本を改めて意識したことであろう」と述べている⁸。

他方で、戦後間もない時点では採録されている外国文学の種類にはある種の偏りがあった。サンフランシスコ平和条約が発効した翌年である一九五三年に広橋一男は『日本文学』誌上において、占領期の高校国語教育について「教科書に翻訳文学が、今までにみられなかったほど多く採録されている」が、その内実は「雑然としたありさま」であり、到底「民族の独立」を勝ち得るようなものではないと批判した。広橋の主張によれば、採用されている西洋の外国文学作品は英米仏の文学が大半をしめており、とくにロシア文学は「故意に避けたとしか思われぬ」という（広橋による表によれば九六点の高校国語の西洋文学教材のうち、英米が三六、フランスが三三、ドイツが一五、ロシアが四）⁹。広橋が議論の対象としているのは高校のみだが、中学においてもロシア文学は占領期は採録は少なく、五二年までに使用を開始された中学の検定国語教科書に採用された外国文学作品の国別の内訳はイギリス一五、アメリカ二〇、フランス一三、ドイツ二、ロシア一（その他ベルギーやスイスなど西欧諸国のものが二二）というものだった¹⁰。こうして見ると、「開ける」「世界」はもっぱら西側をむいていたと言える。そういった中で五三年以降に国語教科書に採用され定着していったのが、五三年より採用された中国の「故郷」と五四年より採用されたロシアの「信号」だったのだ。

話を戻す。『教科書レポート』掲載記事の「反権力・反体制」というカテゴリー区分だが、たしかに「信号」では、労働者や労働問題、そして待遇への不満や上役との衝突やテロ未遂が描かれていた。もちろん日本にも、労働者やその過酷な状況、社会における不正とその改善を求める闘争を描くプロレタリア文学のようなジャンルは存在していたが、七〇年代の時点で「権力とか文部省」のせいで掲載されづらいものという認識が編集側から示されていた¹¹。事実、プロレタリア文学の代表的な教材である葉山嘉樹「セメント樽の手紙」が高校の国語教科書に初採用されるのは七三年度（学校図書『高等学校現代国語一』）のことである。

他方、外国文学教材は「外国のできごとだとし」ておくことができるという点で、事実関係の追及をまぬがれることができ、検定通過の面で有利だった。実際、五〇年代を中心として国語教科書には、エドガー・アラン・ポー「うずしお」、ピセンテ・ブラスコ・イバーニェス「まぐろつり」、モーパッサン「ジュールおじ」のような過酷な労働環境で働く労働者を描いた外国文学教材が多く見られるのだ。

つまり「信号」は労働者や労働問題を描いた作品として、一種日本のプロレタリア文学の代替のようなかたちで採用され、広まったのではないかと考えることができる。もちろんこれは表立って語られるようなものではなく、関係者のあいだの暗黙の了解だった。

実際、「働く人々」という直接的な単元名が使用されたのは初採用の『山本有三編集 国語総合編 中学3年の1』のみで、五九年より使われた『山本有三編集 国語 中学2年下』では「文学鑑賞」という単元名になり、労働という観点自体は単元名としては教科書の表面から退いてしまっている。なお、単元名という点に関して興味深いのは、六〇年代より「人間」という言葉が入った単元に「信号」が採録されることが増えた点だが¹²、その理由については後述する。

当時の教科書の、作品のあとにおかれた学習の手引きなどを見ると、直接に労働問題に触れたものは少ない。他方で「セミヨンの戦場でのことは、物語の発展にどんな役わりを持っていますか」や¹³、「セミヨンの経歴と線路番になった経緯」など¹⁴、セミヨンの労働者以前の過去に着目するようにながす設問が目につく。またセミヨンが、軍隊時代のかつての上官に職を斡旋されるという筋書きについてもとりあげている教科書もある（「ふとめぐりあったかつての部隊将校の駅長から、線路番の仕事を世話され、ようやく落ち着いた生活には入れた時は、とてもうれしかっただろうと思う」¹⁵）。このように、見落とされがちだがセミヨンが露土戦争の復員兵であるというディテールは、作品が国語教科書に採用されるにあたって少なくない意味をもっていたようなのだ。このことについては第五節で後述する。

4 読書感想文という「囲い込み」

前節では「信号」という作品が最初に教科書に採用された際の枠組みや、その後の単元構成、手引きなどを見てきた。こうしたものは、教科書の作成側が教材をどう読ませようとしたのかを示すものだが、それを受けて生徒が実際にどう作品を読んだのかはわからない。しかし、例外的に児童生徒が自分の感想を開陳できる媒体が存在する。読書感想文である。一九五五年よりはじまって現在もつづいている読書感想文全国コンクールは、全国学校図書館協議会と毎日新聞社が主体になって、全国各地の「青少年」から学校経由で募った読書感想文を顕彰するというものだ。

そもそも読書感想文とはどういった理念のもと、実施・運営されているのだろうか。すぐれた感想文は年ごとにまとめられて文集が編まれるのだが、その文集の冒頭に置かれた全国学校図書館協議会会長の石山修平の「はしがき」によれば、「読書指導は、国語教育

においてたいせつな地位をしめている」という認識から、「道徳教育の方法としても、人間をとくにその内面につちかい、精神を高め深めるために、よい読みものを、よく読むことが、近ごろあらためて重視されてきた」という¹⁶。ここでの「よい読みもの」のような発言の裏には、マンガバッシングに見られるような五〇年代に猛威を振るった悪書追放運動の影響を見てとることができる。

そして生徒が書いた感想文が学校の司書教諭を通じて提出されるシステムは、学校と出版社が手を結んで青少年に読書文化を浸透させる役割をはたしていく。それだけではない。児童文学研究者の佐藤宗子がユーゴーの『ああ無情』（『レ・ミゼラブル』）やモーパッサンの「ジュールおじさん」の例を出して指摘するように、文集に掲載されて刊行された感想文は「読書指導」に役立つように、という目的で当時刊行されていた少年少女向けの「世界文学全集」に引用された。このようにして「出版社－家庭－学校の三者が「子ども」読者」の囲いこみを行ったのだ¹⁷。

他方で佐藤は指摘していないが、「ジュールおじさん」や『ああ無情』が国語教科書の定番作品だったように、読書感想文の対象になる作品と、国語教科書の掲載作品はたびたびクロスしていた（つまり「囲いこみ」は実は国語教科書を使っても行われた）。読書感想文という一冊の本を読んで書くものだという通念からすると意外なことだが、過去読書感想文コンクールの入選作品集にはしばしば短編の感想文も掲載されていた。そして、たびたび「信号」の読書感想文もすぐれたものとして掲載されていたのである。

「信号」の感想文がはじめて文集に掲載されるのは実施三回目の一九五七年のコンクールのことである。背景には当時「信号」が岩波文庫のような文庫だけではなく、少年少女むけの選集や全集、雑誌に収録されていたということもあったのだろう¹⁸。このときのコンクールでは「信号」を扱った感想文が二点、入選している。まず大分県杵築市杵築中学校三年の永村洵子によるものを見てみよう。永村は本作を「人間の真実の愛を探求するかけがえの無いストーリー」だと評するところから文章を書き起こしている。そしてセミヨンだけでなく「社会に対して深い疑問と反抗心」を持っている「ワシーリーの考え」も「一応筋が通っていい」とするが、「ワシーリーは自分の考えを社会運動として進めずに自分ひとりで解決を断言したため、ついになんにも関係のない人にまで危害の及ぶことをしでかしている」と批判する（これは裏を返せば、「社会運動」の肯定である）。そして「一八七〇年代のロシア帝国の封建制の強さ」について触れ、「上流社会のものは、まるで神様のような待遇を受け下流社会、たとえば番人など人間とも思われぬような生活を送って」おり、作者のガルシンが「封建時代のロシアのみにくい社会悪を鋭く感じ、不正の追及に心を打ち込」んだことを強調している。そして自分も「人間の良心に強く強く望みをかけ、希望をつないで、誠実に、心暖かく自分に恥じない一生を送っていきたい」と結ばれている¹⁹。

もうひとつの入選作は神奈川県川崎市高津中学校三年の亀甲邦敏によるものだ。亀甲は、作品を読んで「社会主義思想が一八八七年にすでに芽ばえていたこと」、「ロシア国民

には、セミヨンによって代表される盲従型——主に農民——と、ワシーリイによって代表される社会主義型——主に軍人、労働者——の二つの性格があること」がわかったとする。そしてセミヨンとヴァシーリイの「どちらに賛成するのか」と自らに問いかけ、セミヨンの「世の中をあきらめきっている消極的な面」を批判する一方で、ヴァシーリイを「現在の悪い境遇から自分の力でなんとかぬけだそうとする、その気迫に賛成する」としている。そして感想文は、「僕達中学生は次代の日本を背負って立つべき任務を持っている。そのためには理想的な人間となり、社会に貢献できるようになるよう大いに努力し、あらゆる困難に打ち勝っていかなければならないのだ」という決意表明で締めくくられる²⁰。

一九六〇年の第六回コンクールでは、「信号」の読書感想文がただの入選ではなく全国学校図書館協議会長賞に選ばれている。執筆者は大阪府堺市浜寺中学校の立石泉。こちらは前のふたつの感想文とはちがい「国語の時間に学習した」と明言されている。立石の感想文は五七年の亀甲の感想文と酷似しており、セミヨンとヴァシーリイを「当時のロシアの大衆の中の大ざっぱな二つのタイプ」だとしたうえで、「その頃のロシアは、どの国も過去にもあったように、上部の者は権力を降りまわしていきばり散らし、下部の人々は満足に人間扱いもしてもらえない、帝政時代であった」と当時の社会状況に言及している。それだけでなく、ヴァシーリイのことを「自分の力で自分の道をきり拓こうとする強い気迫はりっぱ」だとしてその気迫を評価している点も亀甲の感想文とまったく同じである。こちらの感想文は、「進歩的な人たちの間に、革命のきざしはあったのだろうか」と待ち受けるロシア革命の存在に言及したうえで、「彼〔ガルシン〕の夢は、やがて血染めの旗となって、セミヨンからワシーリイへ、それからもっと多くの人々へと受け継がれて行った」と締めくくられている²¹。

現在の目からすると、こうした感想文が中学生によって書かれていたことに驚きを禁じえない。感想文を書いた六五年前の生徒たちがどんな大人になったのか興味はつきないが、三つの感想文にはいくつかの共通点がある。ひとつは作品の背後に社会を見ようとする傾向が強いということ。当時のロシアの封建的な社会とそこで生きる人々の典型として登場人物をとらえている。そして作中の社会の問題が、自分たちの社会の問題ともつながっていること。列車脱線事故未遂を起こしたヴァシーリイを（限定的であっても）社会変革の意思ありとして評価していること。最後にその社会で「自分がいかに生きるべきか」だけでなく、「自分が社会をどう変えていくべきか」という問題意識が見られること。

労働者の搾取という問題を前提として労働者の連帯やよりよい社会の建設を目指す、まさにこういった読み方はプロレタリア文学や社会主義リアリズム的な小説の読み方だと言える。五〇年代の読書感想文を調べてみると、趙樹理『李家荘の変遷』やロジェ・マルタン・デュガール『チボー家の人々』のような社会主義的な小説も高校の読書感想文の題材として選ばれているが、さすがに中学生が読むには長く、内容も難しすぎただろう。その

点、「信号」は短く、中学生が社会問題を考えるうえで好適だったのだ。

しかし、そもそもこのような感想文をなんの誘因もなく中学生が自発的に書きうるものだろうか。当時の中学生にとって労働は現在よりもはるかに身近なものだったとはいえ、労働問題に意識的だった生徒がことさら多かったとは思われない。これはプロレタリア文学についての研究だが、国文学者の藤本晃嗣は、葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」を用いて興味深い授業実践を行っている。それによれば、作品がプロレタリア文学であるという情報を高校生にあたえる前とあたえた後とでは「作品の捉え方が全く異なるものに変化」してしまったという。具体的には、「セメント樽の中の手紙」を「初読段階で労働者の社会問題という観点から捉えたものはいなかった」にもかかわらず、プロレタリア文学についての背景知識を教授したあとでは生徒たちは登場人物の与三を「労働者」のひとりとしてとらえ、資本家と労働者の対立を背景に読みとるようになったというのだ²²。

このような研究をふまえると、「信号」の読書感想文が書かれるプロセスでも、なんらかの外的要因が存在したのではないかと考えてみたくなるのは自然だろう。ただし一九六〇年の立石泉以外の感想文は授業で「信号」を読んだとは書かれていないため、どのようなかたちでそれが行われたのかはわからない。それは指導と呼べるほど明確なものではなく、ある種の微妙な空気感のようなものだったのかもしれない。このような提起を行ったうえで、次節ではこうした読書感想文が書かれた当時の社会状況について触れてみたい。

5 松川事件——昭和の黒い霧

五〇年代中盤に採用がはじまった教材「信号」を考えるうえで、当時、あるいはそれ以前の鉄道をめぐる状況は見逃すことができない。戦後、「信号」の作中で起こりかけたような脱線事故は頻発しており、その中には鉄道事故としては日本最大の死者一八四人を出した一九四七年の八高線脱線転覆事故もふくまれていた。しかし教材「信号」の背景を考えるうえで、とりわけ重要な「事故」は一九四九年に発生した松川事件だろう²³。下山事件、三鷹事件とならんで国鉄三大ミステリーと呼ばれる本事件だが、現職の国鉄総裁が轢断死体で発見されるというショッキングな内容の下山事件が二一世紀になっても映像化などの機会に恵まれているのに比して、松川事件の現在の知名度は数段劣ると思われるため、その顛末について概説しておく。

一九四九年八月一七日午前三時九分、東北本線松川駅と金谷川駅のあいだの急カーブで旅客列車が脱線し、転覆した機関車の乗務員三人が死亡した。捜査の結果、故意にレールが外されていたことが判明した。米軍占領下のいわゆる「昭和の黒い霧」においては、四八年の庭坂事件、四九年の予讃線事件、五一年のまりも号脱線事件など列車を故意に脱線させる同種の事件が続発しており（いずれも未解決）、初手から反権力・反国家の思想犯罪とあたりをつけた捜査当局は、大量人員整理に反対した事故現場近隣の東芝松川工場労働組合と国鉄労働組合構成員の共同謀議による犯行と見なし、自白・自供をもとに芋づ

る式に二〇名（うち一四名が共産党員）を逮捕・起訴した。しかし取り調べはざさんなもので、検察側の描いたシナリオの矛盾点が公判の過程で都度明らかになっていったが、五〇年の福島地裁による第一審は検察の主張を全面的に認めるもので、判決は被告人二〇名全員が有罪、うち五名が死刑（求刑は十名死刑）という苛烈なものだった。五三年の仙台高裁による第二審では検察側の主張の欺瞞がなお一層明らかになっていたにもかかわらず、第一審の判決が踏襲され一七人が有罪、うち四名が死刑判決を受けた。

しかし松川事件の特殊性は、一列車往來妨害事件の域を超えて、「運動」になっていった点にある。直接の関係者ではない労働者たちが結成した「松川守る会」は全国へと波及していき、署名活動や現地調査といった一連の運動へとつながっていった。また第二審を傍聴した作家の広津和郎は偏向判決だとして裁判批判の論陣を張り、そのような主張は作家・文化人のあいだにも広がっていった。

本事件が本格的な国民の関心事になっていったのはやはり五八年の最高裁の上告審にかけてであり、最高裁大法廷口頭弁論にむけて十月から十一月には仙台から東京までの三万人を動員した松川大行進が、十一月の口頭弁論初日には無罪釈放要求集会が開催された。関心の高まりをうけて口頭弁論の内容は、全国紙でも連日詳報され、検察側の矛盾が衆目にさらされた。結果、五九年八月には七対五のきわどい評決ではあったが上告破棄差戻しの判決がくだされることになった。その後、六一年の差戻審で無罪判決、六三年の再上告審でそれが確定し、十四年間にわたる裁判が終結した。こうして松川事件は一審での二〇名有罪から最終的には全員無罪判決という経緯をたどり「戦後最大の冤罪事件」と呼ばれるようになったのである（なお、事件自体は現在も未解決）。

なぜこのような、全員有罪が急転直下全員無罪になるという、極端な冤罪事件が発生したのだろうか。背景には、当時の国鉄をめぐる緊迫した情勢があった。戦後、国有鉄道事業は旧植民地からの引き揚げ者や復員兵の受け皿の役割を果たした。運輸白書によれば、四五年度には約十万人、四六年度には約六万五千人もの復員者が鉄道事業に雇用された。四六年に結成された国鉄労働組合（国労）はこのような経緯もあってふくれあがり、最大の労働組合として存在感を放っていた²⁴。

他方、政府はドッジ・ラインによる財政立て直し政策のため公務員の人員整理を計画、四九年五月には行政機関職員定員法が成立した。同法により、公社化された日本国有鉄道（国鉄）の職員の解雇が数万人規模ですすめられ、それに呼応・反発するように七月に下山事件、三鷹事件が相次いで起こった。まさに物情騒然とする中で八月に福島で事件は起こったのである。そして事件翌日の一八日には当時の吉田茂内閣の増田甲子七官房長官が早くも「三鷹事件はじめその他各種事件と思想底流において同じもの」だと断じる談話を発表し、なし崩し的に決め打ちの捜査が行われた。民主化・赤化を妨げる逆コースの風が吹き荒れる渦中に、国鉄と労働者の問題は焦点化されたのだ。

ざっと事件とその後の経過、背景について概観したが、松川事件が労組や共産党による組織的な犯行として事件化され、国民的な議論を呼んだ時期と、「信号」が教材化され広

まり、読書感想文を集めた時期とは重なりあってくるのである。

「信号」ではヴァシーリイによる劣悪な労働環境からの上役との対立、つづいて憂さ晴らしのようなかたちでの故意の鉄道脱線事故未遂が描かれる。ヴァシーリイが外したのは松川事件と同じく、脱線を確実にするためカーブのところの線路であった。松川事件では当初、国鉄に対する大量人員整理への反発からの思想犯罪と見なされ、メディアもそれに同調した。「信号」の読書感想文では、当時の中学生読者はヴァシーリイのレール外し行為を社会変革の意思があるものとして評価していた。「信号」ではヴァシーリイではないが、セミヨンは露土戦争の復員兵であり、仕事がなかなか見つからない中で鉄道の線路番として雇用されたという経緯に着目する手引きが国語教科書に多く見られたのはすでに指摘した。そして戦後の国鉄でも復員兵が多く働いていた。なお国鉄での人員整理は、先任順位が考慮された²⁵。つまり勤続年数が短い戦後に雇用された復員兵から解雇されていった。

こうした文脈において「信号」は、セミヨンの身を投げ出しての人命救助の美談を描いている作品という以上に、読み手の側に「信号」に同時代日本の問題を投影しやすい材料がそろっていたのである。現在の私たちが想像する以上に、一九世紀末のロシアと戦後の日本という一見懸け離れた時空間が読者の脳裏で結ばれていたのだ。

ではこのように国語教育に浸透し、読書感想文コンクールに次々と入選作を生んでいた「信号」がなぜ、定番教材の座を追われなければならなかったのか。次節では六〇年代に起こった「信号」をめぐるある論争を見ていくことにする。

6 「信号」の「道徳」化とその退潮

「信号」は人気教材だったこともあり、五〇年代から六〇年代にかけていくつかの授業実践や報告がなされている。中でも六五年に『国語教育』誌上で交わされたやりとりは興味深いものだ。

この発端となったのは、同誌に寄稿された「失敗した「信号」の授業」という授業報告だ。寄稿者は東京都武蔵野市立第三中学校教諭の貝塚斌である。それによると、卒業期の生徒を対象にして、「信号」をほかの教員が参観する研究授業として取りあげ、セミヨン、ヴァシーリイのそれぞれの立場から生徒に感想文を書かせ、それを手がかりにして授業を行ってみたところ、「授業終了後の研究会」で、ほかの教員から以下のような指摘を受けたという。

時間が足りなかったとはいえ、ヒューマニズムについて教師がまとめてしまった方法にも問題があった。こんな点からも、きょうの授業は道徳の授業としてみられるのではないか。

こういった指摘を受けた貝塚は授業が失敗したという認識にいたり、「文学の指導につい

て、道徳指導との一線を、どこではっきり区別したらよいか」という疑問を読者に対して投げかけている²⁶。

問題なのは（これは後述の熊谷孝からも指摘されていることでもあるのだが）、ここで貝塚が生徒に「押しつけ」という「ヒューマンイズム」の内容が報告内のどこにも書かれていないということだ。実は、貝塚が参照しているとおぼしきものが先行する文献に存在する。国語教育学者の熊沢龍が『国語教育研究講座』（一九五九年）に寄稿した「信号」の教材研究である。ここで熊沢は「この作品に一貫して流れている作者の意図」をヒューマンイズムと見なしている。しかしここで熊沢の言う「ヒューマンイズム」はかなり特殊な理解に基づくものであって、注意を要する。まず、ヒューマンイズムとは「人道主義」と「人間主義」の二種類からなっているという。そして後者にはあらゆる非人間的なものに対する抵抗がふくまれると主張する。その「非人間的なもの」には資本主義もふくまれるのだ。

一方人間の自由活動を肯定して出発した資本主義も、高度に成長した現在は一部資本家を除いては、多数の労働者に対し自由を束縛する状態をもたらしてきている。こういう社会機構の矛盾から人間の自由を守ろうとして起こる革新運動も、やはり一種の人間主義である。

人道主義と人間主義、それぞれがセミヨンとヴァシーリイという二人の登場人物に表象されており、それが物語の最後に止揚されて真の「ヒューマンイズム」になるという。そして「ヒューマンイズムの追及ヒューマンイズムの肯定が、この作品の主題であるとすれば、主人公はセミヨンであるよりも、むしろヴァシーリイであるといっても言い過ぎではあるまい」と、熊沢は述べる²⁷。

正直に言って、自己犠牲のセミヨンの行動と、（仮に待遇改善のためであったとしても）逆恨み的に多数の人命を危機にさらす事故を故意に引き起こそうとするヴァシーリイの行動を「ヒューマンイズム」の一語でひとまとめにするのは相当な論理の飛躍を感じる。逆に言えば、「信号」を共産主義や社会主義、革命思想を前面に出して授業で教えることが不可能なため、ヒューマンイズムという曖昧な言葉が捻出されたのだともとれる。しかしこの語は、熊沢による教材分析以降、授業実践で散見されるようになっていく。第二節では、ある時点から「信号」が採録される節の名前に「人間」という語がよく見られることを指摘した。これも熊沢の影響によるところが大であろう。

話を戻す。貝塚はこの熊沢による作品研究をもとに研究授業を行い、結果、研究授業を参観していたほかの教員から道徳の「押しつけ」ととらえられてしまった。この貝塚の報告に対して同号で応答を行ったのが、文学教育研究者集団を組織したことで知られる国文学者の熊谷孝である。その「文学教育と道徳教育」と題された文章で熊谷は、「かんじんの授業の中身がハッキリしない」として貝塚の授業については判断を留保しつつ、突如として作家批判、作品批判の口火を切るのである。「一八八〇年代のロシアという、自由の

ひとカケラすら見あたらないような専制主義の時代」に生まれついたガルシンの文学は「文学史的な宿命」として「スケールの狭さと、底の浅さ、つまりは作品としての弱さ」を抱えざるをえなかったと熊谷は言う。ヴァシーリイに「すでばちで八方破れな反抗の姿勢」が見てとれるとしつつも、同時に以下のように述べるのである。

だが、そのことが作品そのものの<送り内容>として実現しているわけではない。いわば<受け内容>として、媒介的にそんなふうに取りとれる、というだけのことなのである。[中略]『信号』という作品は、ワシーリイというこの仕様のないやつが、セミョーンの献身と自己犠牲の崇高な行為の前に、前非を悔い更生する話である。教訓ばなしとしては、よくできた「お話」ではないか。²⁸

ここでは重要な指摘がされている。ヴァシーリイの行動の背後に反抗——三〇年後のロシア革命につづくような——を見るのは、いわば受け手側の過剰な読みこみにすぎないこと。そんなものは幻想であり、ヴァシーリイは所詮、「仕様のないやつ」であり、「信号」は結局、「教訓ばなし」でしかないということ。「文学が芸術であることを前提とし、文学を芸術のものとして教育するために必要な理論を展開した」熊谷にとって²⁹、文学作品が社会科や道徳教育の手段とされることは耐えられないことだった。こういった熊谷の文学教育論の背景にもやはり、戦後、敗戦によっておこったアメリカ的な新教育の流入への反発や³⁰、五八年に「逆コース」の中で復活した道徳教育への抵抗という面も多分にふくまれていたことは否めない。ゆえに熊谷は「信号」という作品自体が「列車転覆という異常な事件」をもちいた「こしらえものの設定」のうえに成り立っていること、それこそが「こんちの「道徳」教育にとって、おあつらえ向きの設定だ」という点で、『信号』は教材として問題がありはしないか」と述べて「信号」を厳しく批判したのである。

熊谷の論説に対する反響は大きかったようで、『国語教育』誌の九月号には千葉県山武郡芝山町立柴山中学校教諭の伊藤貞夫および埼玉県東松山市立松山中学校教諭の高橋信雄からの寄稿が寄せられた。いずれも授業での実践をつうじて教材としての「信号」を擁護する内容だった。特に伊藤の寄稿は編集部の但し書によれば「熊谷先生の御意見に触発されて書かれ」、熊谷の「信号」の評価を「納得のできない」として反駁するものだった。その中で伊藤は授業をすすめるにしたがって生徒たちの反応が複雑なものになり、二人の登場人物を類型的にとらえる見方から「多面的な解釈をするようになっていった」としてその教材としての「適切」さを力説した³¹。

それに対して熊谷はやはり同号に「文学教育／その方法と教材について——再び『信号』をめぐる」と題した文章を載せ、伊藤らの実践の有効性を認めたいうえで、それでもなお作品自体が「“多面的な解釈”を成り立たせるようには書かれてはいない」として、「この作品の表現の時点と次元においては、セミョーンは善玉でありワシーリイは悪玉以外」の何者でもないという主張を堅持した³²。

このように『国語教育』誌上で論争が繰り広げられたわけだが、熊谷の「決して良い作品とはいえない」という「信号」に対する評価は、その後の教材研究史においてある程度定着していったように思える。

たとえば、七〇年に刊行された『文学教育実践講座』には田近洵一による「教材研究」が掲載されたが、そこで田近は「下層階級の者から人間らしい暮らしを奪う帝政ロシアの社会的矛盾や人間の強欲さの問題は、会話を通してなまの形で提出されたまま、最後までついに何の解決も与えられていない」ことや、「この作品は、反社会的行動を否定し、犠牲的行為を賛美して終わっている」ことなどを本作の「弱点」としてあげ、「文学作品としての結晶度の高さからみた場合、『信号』は、必ずしもすぐれた作品ということとはできない」という評価を下している³³。田近のような国語教育学者の下した評価は、『国語教育研究大辞典』のようなリファレンス的な資料においても、「文学作品としての結晶度に疑問もある」として引き継がれることになった³⁴。

「信号」の採録は六〇年代後半から急減していくのだが、もちろん熊谷の評価だけにその原因を求めることはできないだろう。そもそも『国語教育』誌上の論争も、貝塚の授業が「失敗」したことに端を発していた。それが失敗せざるをえなかったのは、やはり時代状況が激変していたせいでもあるのではないか。

六八年に刊行された『小説の教え方』に、お茶の水女子大学附属中学校教諭の斎藤喜門による「信号」の授業実践が掲載されている。斎藤はヴァシーリイを中心にとる見方、ヴァシーリイを進歩主義者とする見方が想定していたほどうまくいかなかったことから「この作品の主題はむずかしい」という感想を率直に述べている。他方でヴァシーリイが内に強く抱いていた「抵抗、闘争」は現代においては「高度な文明から自己を回復しようとする」「ヒッピー族、フーテン族」に表れているのではないかとしている（そしてその話に及んだとき、生徒は「目を輝かせていた」とも）³⁵。一九六〇年代後半といえど学生運動の盛んだった時期のはずだが、同時にこのころ中学・高校で学んでいたのはのちに「しらせ世代」とも呼ばれるようになる世代でもあり、上の世代への反動からか、政治に対して無関心とされた。高度成長が進展する中で、確実に教科書読者である中学生の価値観も変化していた。

7 おわりに

ガルシンの「信号」は、戦後、それも五〇年代から六〇年代前半という時空間においてのみ説得力のあった教材だったと言えるかもしれない。「信号」を教材として成立させていたのは、当時の教科書編集者や教員、生徒といった共同体であるが、根底には作品へのある種の曲解があった。その点、教材「信号」の鏡像とも下敷きともとれるような関係だったのが四九年に発生した松川事件だった。松川事件を労働問題に端を発する思想犯罪と言下に断定した政権や検察と、ヴァシーリイの行為を社会変革を目指したものと見なした教員や生徒は、前者は労働者への濡れ衣、後者はヴァシーリイの擁護というベクトルこ

そ一八〇度異なるものになったにせよ、同じ解釈のフレームを共有していたのだ。六五年に「王様は裸だ」と言ったのは熊谷だったが、そもそも時代が移りかわり、あるときまでリアリティをもって感じられていた設定が、「こしらえもの」にしか見えなくなってしまったという事情があるのではないか。それまでは機能していたヒューマンイズムの名を借りたイデオロギーの注入が、生徒に対する「道徳」の「押しつけ」のように感じられてしまった時点で、「信号」のアクチュアルな文学教材としての命脈は絶たれていたとも言える。松川事件が一審二〇人全員有罪から最終的に全員無罪へと判決が変わり、そして人々の関心事では次第になくなっていったように、解釈のフレームそれ自体が時代とともに変容したのだ。それは一言でいえば「戦後」というフレームだった。

しかしそれは本国でも同じだったのかもしれない。一八八八年、早すぎる死をむかえたとき、ガルシンは同世代の知識人が抱えていた改革運動への挫折感を体現する存在として、時代の犠牲者として祀られた。それはソ連時代にも引き継がれた。研究者の大山麻稀子によれば、「ソ連時代、上からのイデオロギー操作の影響がさらにそこに加わり、ガルシンの主人公は革命運動家を体現しており、主人公の偉業は革命的自己犠牲を意味しているとされた」という³⁶。つまり、ガルシンの作品のなかにあるなにかしらの間隙（それは純粋に作品評価からすればマイナスだったかもしれない）が、その時代時代のイデオロギーによって充填されて読まれてきた、読まれざるをえなかったというところに作家と作品の（大げさに言うならば）悲劇があった。もちろん文学作品は開かれたものであって、常にそのような曲解が生じる可能性は秘めているが、ガルシンの場合作者が夭折し、その後の言動がわからなくなったことで解釈の余地が大きくなったせいもあったかもしれない。

たしかに熊谷の言うように作品に書かれていることと、書かれていないことは区別しなくては行けない。「信号」にのちのロシア革命につづく変革の意思がはっきりと描かれているとは言いがたい。他方で熊谷は教材から読者が受けとったような「あすへの展望は、いまだ彼や彼の時代のものではなかった」と述べて、作品が書かれた当時は労働者に革命を託すなどまったく思いもよらないことだったと説くが³⁷、それもまた推量に過ぎない。帝政ロシアの検閲下にあつては、表立って労働運動を肯定するような内容は発表できなかったのはまちがいないが、セミョーンが自分の血で染め上げたハンカチは、労働者のシンボルである赤旗となってヴァシーリイに引き継がれていくのであり、熊谷の意見に反して、ガルシンが検閲官の目をかいくぐる形でメッセージを残した可能性は否定できない。少なくとも教科書を作成する側は、検閲ならぬ検定という制限の下で、血を流して倒れる帰還兵から労働者に旗が手渡されるという物語に自分たちの時代を重ねたのだ。いずれにしても、読み手の側でそのメッセージを受けとる必要性が薄れれば解釈は説得力を失い、色あせていく。

八七年の第三十三回読書感想文全国コンクールでは、ひさびさに「信号」の感想文が入選した。山形県米沢市立第三中学校二年の須貝和代による感想文である。「最近の私は、

自分の中のもう一人の自分を意識することが多くなった。特に醜い心に気付き、悩むことがある。そんな時、この本に出会った」と書きだされるこの文章では、「当時のロシアの社会状況」への言及もないわけではないが、ヴァシーリイとセミョンという二人の対象的な登場人物の対立と和解も、それぞれの人物の内面の葛藤の問題として理解される。そして感想は次のような文章で結ばれるのだ。

今、この瞬間にも、どこかで自分の行動を恥じ、愛する心を取り戻している人がいることだろう。[中略]人を愛する美しい信号は、やさしく温かいぬくもりとなって、私の心に一生残ることだろう。³⁸

「愛」や「ぬくもり」といった微温的な語彙で読書から受けた感動を個人的なつながりとしてとらえるこの感想文からは、三十年前の感想文に見られたような改革への意思や責務は感じられない。戦後も政治の季節も過ぎ去り、バブルの真ただ中であって、文学作品を読むということの意味も大きく変わっていった。読書はかつてのように自己変革を通じて社会変革を目指すものではなくなり、登場人物や作者へのシンパシーや共感を通して内省にいたる個人的なものへと移行したのだった。

注

1. Hoyt Long, “Sampling World Literature,” Novel Worlds Conference, McGill University, Montreal, Canada, October, 2018.
2. 以降教科書に関する年号は、刊行年ではなく使用開始年を示す。
3. ヘッセ「少年の日の思い出」はこの時点では、「少年の日」と「少年時代」として掲載されていた同内容の作品を加えても延掲載年は96だった。安藤修平「中学校国語教科書文学教材一覧表」西郷竹彦・浜本純逸・足立悦男編『文学教育基本論文集 第4巻』明治図書、一九八八年、三六一—三八七頁。
4. 府川源一郎『消えた最後の授業—言葉・国家・教育』三修社、一九九二年、一二五—一二七頁。
5. ガルシン『紅い花 他四篇』神西清訳、岩波文庫、二〇〇六年、七九頁。以降、作品からの引用はこの版に拠る。なお本論中に引用する刊行物によっては、登場人物セミヨンやヴァシーリイの表記にセミヨン、ワシーリイなど揺れが見られる。
6. 出版労連教科書対策委員会編「中学国語教材にみる教材の変遷」『教科書レポート』第一三号、一九六九年、五五頁。
7. 「故郷」をはじめ採録した教育出版の国語教科書の編集に携わった国文学者の古田拓は、「魯迅の『故郷』これもむずかしいといわれたいけれど、これくらいのを与えておかなくてはいけないのだといったのです。[中略] 中共の前進の合ことばとして“歩いていくことによって道はできる”という魯迅のことばとか [中略] そういうものを読んで目を開いていくことは、私は非常に大事なんじゃないかと考えているのです」と述べている。古田拓・来栖良夫・今西祐行「読解から読書へ——実作者との対話」『教科通信』五巻一五号、一九六八年、九頁。
8. 吉田の研究が解き明かしているように、戦後国定教科書で外国文学が大量に採用されたのを受けて、検定教科書でも外国文学作品が数多く採録されるようになった。吉田裕久『戦後初期国語教科書史研究』風間書房、二〇〇一年、四八九頁。
9. 広橋一男「高等学校国語教科書の批判——平和教育のために」『日本文学』第二巻第二号、一九五三年、二八頁。
10. 国立教育研究所附属教育図書館・教科書研究センター編『中学校国語教科書内容索引 上巻』（教科書研究センター、一九八六年）をもとに作成。
11. 佐藤勝「社会主義文学・プロレタリア文学教材化の問題」『国語通信』第一二九号、一九七〇年九月、七頁。
12. 主なものとして「人間のすがた」（『中学国語3』大阪書籍、一九六二年）、「人間像の探求」（『現代の国語 中学3』三省堂、一九六六年）、「人間の探求」（『中学校現代の国語 新版3』三省堂、一九六九年）、「人間の生き方」（『中学国語2』日本書籍、一九六九年）など。
13. 山本有三編『山本有三編集 国語総合編中学3年の1』日本書籍、一九五四年、一九四頁。
14. 佐藤春夫・高木市之助・熊沢龍・井上靖ほか編『中学国語3』大阪書籍、一九六二年、一五七頁。
15. 興水実・飛田多喜雄ほか編『中学国語 三年』教育出版、一九六二年、二七五頁。
16. 石山修平「はしがき」『考える読書——読書感想文 全国コンクール入選作品 1957 中学・高校の部』毎日新聞社、一九五八年、一頁。
17. 佐藤宗子「指導される「教養」——二つの少女向け世界文学全集にみる「文学」の役割」『千葉大学教育学部研究紀要』第五八号、二〇一〇年、四一—四二頁。
18. たとえば以下のような文献がある。ガルシン『赤い花 少女のための世界文学選 14』中村融訳、小峰書店、一九五一年。阿部知二ほか編『少女のための世界文学宝玉集 下』宝文館、一九五七年。ガルシン原作・那須辰造文・桜井誠絵「信号」『中学初級コース』一九五六年七月号、一〇八—一一五頁。ガルシン原作・及川甚喜文・松田穰絵「世界名作絵物語 信号」『中学生の友 3年』一九五七年八月号、一七一—二三頁。特に中学生向けの雑誌への掲載は読者の年齢が明確という点で、読書感想文との関連上興味深い。
19. 永村洵子「信号」『考える読書——読書感想文 全国コンクール入選作品 1957 中学・高校の部』毎日新聞社、

一九五八年、一二九—一三〇頁。

20. 亀甲邦敏「信号から得たもの」『考える読書——読書感想文 全国コンクール入選作品 1957 中学・高校の部』毎日新聞社、一九五八年、一三〇—一三一頁。
21. 立石泉「信号を読んで」『考える読書——読書感想文 全国コンクール入選作品 第6回 中学の部 高校の部』毎日新聞社、一九六一年、九—一〇頁。
22. なお「セメント樽の中の手紙」と「信号」は、労働者の体液が染みこんだ形見の布の「切れ」を通じて労働者間の絆が結ばれる点など類似点もある。藤本晃嗣「セメント樽の中の手紙」授業実践——異なる〈読み〉を体験するための教材として『米子工業高等専門学校研究報告』第五三号、二〇一八年、頁数なし。
23. なお本稿の松川事件についての記述は、以下の論文を全面的に参考にしている。伊部正之「松川事件とは何か——福島大学松川資料を素材として」『福島大学地域研究』第五巻第一号、一九九三年、三一—一七頁。
24. 「運輸白書（2）戦後復興・経済発展期における国鉄」<https://www.mlit.go.jp/hakusyo/transport/heisei08/pt1/810102.html>（二〇二四年二月一二日閲覧）
25. 吉田誠「1950年前後における先任権の日本への移植の試み」『大原社会問題研究所雑誌』七二一号、二〇一八年、六一頁。
26. もちろんここには、戦後、軍国主義を助長するものとしてGHQによって一度は廃止された修身が、五八年に「逆コース」の流れの中で復活した道徳教育について、当時の教員の多くは反発や警戒心を抱いていたという事情も加味しなければならないだろう。貝塚斌「報告・失敗した「信号」の授業」『国語教育』一九六五年五月号、六—七頁。
27. 熊沢龍・飛田多喜雄「信号」『国語教材研究講座 第五巻 文学的教材』朝倉書店、一九五九年、一八二—一八五頁。
28. 熊谷孝「文学教育と道徳教育——貝塚氏の授業報告から」『国語教育』一九六五年五月号、九—一〇頁。
29. 鈴木愛理「芸術の媒材としての言葉の教育の成立可能性——熊谷孝氏の論を手がかりに」『広島大学教育学研究科紀要』第二部第六〇号、二〇一一年、八八頁。
30. 熊谷孝「文学教育の到達点」『国語教育史資料 第三巻 運動・論争史』東京法令出版、一九八一年、四二〇頁。
31. 伊藤貞夫「『信号』／私の指導記録」『国語教育』一九六五年九月号、二〇、二三頁。
32. 熊谷孝「文学教育／その方法と教材について——再び『信号』をめぐって」『国語教育』一九六五年九月号、三〇頁。
33. 増淵恒吉・岩澤文雄・弥吉管一・三枝康高編『文学教育実践講座〔中学校篇〕』有信堂、一九七〇年、一八五頁。
34. 牧戸章「ガルシン」『国語教育研究大辞典 普及版』明治図書、一九九一年、一四—一頁。
35. 斎藤喜門「信号」宮崎健三編『小説の教え方』右文書院、一九六八年、二五七、二四—一頁。
36. 大山麻稀子『一九世紀ロシアと作家ガルシン——暗殺とテロルのあとで』東洋書店、二〇一〇年、八頁。
37. 熊谷「文学教育と道徳教育」九頁。
38. 須貝和代「「信号」を読んで」全国学校図書館協議会編『考える読書——読書感想文全国コンクール入選作品 第33回 中学・高校の部』毎日新聞社、一九八八年、四四—四六頁。

参考文献

- Hoyt Long, “Sampling World Literature,” Novel Worlds Conference, McGill University, Montreal, Canada, October, 2018.
- 阿部知二ほか編『少年少女のための世界文学宝玉集 下』宝文館、一九五七年。
- 安藤修平「中学校国語教科書文学教材一覧表」西郷竹彦・浜本純逸・足立悦男編『文学教育基本論文集 第4巻』

明治図書、一九八八年、三六一—三八七頁。

石山修平「はしがき」『考える読書——読書感想文 全国コンクール入選作品 1957 中学・高校の部』毎日新聞社、一九五八年、一一二頁。

伊藤貞夫『「信号」／私の指導記録』『国語教育』一九六五年九月号、二〇—二三頁。

伊部正之「松川事件とは何か——福島大学松川資料を素材として」『福島大学地域研究』第五巻第一号、一九九三年、三一—七頁。

「運輸白書（2）戦後復興・経済発展期における国鉄」<https://www.mlit.go.jp/hakusyo/transport/heisei08/pt1/810102.html>
（二〇二四年二月一二日閲覧）

大山麻稀子『一九世紀ロシアと作家ガルシン——暗殺とテロルのあとで』東洋書店、二〇一〇年。

貝塚斌「報告・失敗した「信号」の授業」『国語教育』一九六五年五月号、六—七頁。

ガルシン『紅い花 他四篇』神西清訳、岩波文庫、二〇〇六年。

ガルシン『赤い花 少年少女のための世界文学選 14』中村融訳、小峰書店、一九五一年。

ガルシン原作・那須辰造文・桜井誠絵「信号」『中学初級コース』一九五六年七月号、一〇八—一一五頁。

ガルシン原作・及川甚喜文・松田藤絵「世界名作絵物語 信号」『中学生の友 3年』一九五七年八月号、一七—二三頁。

亀甲邦敏「信号から得たもの」『考える読書——読書感想文 全国コンクール入選作品 1957 中学・高校の部』毎日新聞社、一九五八年、一三〇—一三一頁。

熊谷孝「文学教育／その方法と教材について——再び『信号』をめぐる」『国語教育』一九六五年九月号、二八—三〇頁。

熊谷孝「文学教育と道徳教育——貝塚氏の授業報告から」『国語教育』一九六五年五月号、八—一〇頁。

熊谷孝「文学教育の到達点」『国語教育史資料 第三巻 運動・論争史』東京法令出版、一九八一年、四一九—四二〇頁。

熊沢龍・飛田多喜雄「信号」『国語教材研究講座 第五巻 文学的教材』朝倉書店、一九五九年、一八二—二〇二頁。

国立教育研究所附属教育図書館・教科書研究センター編『中学校国語教科書内容索引 上巻』教科書研究センター、一九八六年。

興水実・飛田多喜雄ほか編『中学国語 三年』教育出版、一九六二年。

斎藤喜門「信号」宮崎健三編『小説の教え方』右文書院、一九六八年、二四—二五八頁。

佐藤春夫・高木市之助・熊沢龍・井上靖ほか編『中学国語3』大阪書籍、一九六二年。

佐藤勝「社会主義文学・プロレタリア文学教材化の問題」『国語通信』第一二九号、一九七〇年九月、七—一〇頁。

佐藤宗子「指導される「教養」——二つの少年少女向け世界文学全集にみる「文学」の役割」『千葉大学教育学部研究紀要』第五八号、二〇一〇年、四一—四二二頁。

出版労連教科書対策委員会編「中学国語教材にみる教材の変遷」『教科書レポート』第一三号、一九六九年、五—五頁。

須貝和代「「信号」を読んで」全国学校図書館協議会編『考える読書——読書感想文全国コンクール入選作品 第33回 中学・高校の部』毎日新聞社、一九八八年、四四—四六頁。

鈴木愛理「芸術の媒材としての言葉の教育の成立可能性——熊谷孝氏の論を手がかりに」『広島大学教育学部研究紀要』第二部第六〇号、二〇一一年、八七—九五頁。

立石泉「信号を読んで」『考える読書——読書感想文 全国コンクール入選作品 第6回 中学の部 高校の部』毎日新聞社、一九六一年、九—一〇頁。

永村洵子「信号」『考える読書——読書感想文 全国コンクール入選作品 1957 中学・高校の部』毎日新聞社、一九五八年、一二九—一三〇頁。

広橋一男「高等学校国語教科書の批判——平和教育のために」『日本文学』第二巻第二号、一九五三年、二六—三四頁。

府川源一郎『消えた最後の授業——言葉・国家・教育』三修社、一九九二年。

藤本晃嗣「「セメント樽の中の手紙」授業実践——異なる〈読み〉を体験するための教材として」『米子工業高等専門学校研究報告』第五三号、二〇一八年、頁数なし。

古田拡・来栖良夫・今西祐行「読解から読書へ——実作者との対話」『教科通信』五卷一五号、一九六八年、四一一三頁。

牧戸章「ガルシン」『国語教育研究大辞典 普及版』明治図書、一九九一年、一四一頁。

増淵恒吉・岩澤文雄・弥吉管一・三枝康高編『文学教育実践講座〔中学校篇〕』有信堂、一九七〇年。

吉田裕久『戦後初期国語教科書史研究』風間書房、二〇〇一年。

吉田誠「1950年前後における先任権の日本への移植の試み」『大原社会問題研究所雑誌』七二一号、二〇一八年、六一一七五頁。

山本有三編『山本有三編集 国語総合編中学3年の1』日本書籍、一九五四年。

Garshin's "The Signal" as Educational Material in Postwar Japan

Shun'ichiro AKIKUSA

This paper explores the reception of Vsevolod Garshin's short story "The Signal" as teaching material in postwar Japan. In this story, Semyon, the protagonist, gets a job as a railroad trackman and meets a coworker, Vasily, who is dissatisfied with his working conditions. One day, Semyon discovers that Vasily has intentionally taken a rail off the track. To prevent the derailment of an oncoming train, Semyon waves a flag dyed red with his own blood. When Semyon faints from blood loss, it is Vasily who takes the flag from Semyon's hand and stops the train.

Though Garshin was a minor writer in comparison with Chekhov, "The Signal" became part of the canon in Japanese textbooks in 1950s. This may be attributed at least in part to the textbook authorization system. Due to the difficulties of adopting native Japanese proletarian literature, works of foreign literature such as "The Signal", which were less likely to be scrutinized for factual accuracy, were chosen as a teaching material to address labor issues in the classroom.

This canonization was influenced by Japan's labor issues at the time. Post-war Japan witnessed mass layoffs conducted by Japan National Railways. In this context, the Matsukawa Incident in 1949, a train derailment caused by loosening the rails, was seen as a crime committed by communists. Intellectuals and workers, who opposed the unfair trial, organized petitions and gatherings to advocate for the defendants' exoneration. In this context, "The Signal" was chosen as a subject for a reading essay competition, with particular emphasis on defending Vasily.

This paper concludes by reflecting on the intersections of literature, ideology, and education, considering how "The Signal" served as a lens through which postwar Japanese society could grapple with its recent history and ideological questions. This examination reveals the complex dynamics at play in the adoption and eventual abandonment of a literary work within educational curricula.